

「男らしさ」と「自分らしさ」再考―男らしさの鎧を脱げば本来の「自分」が現れてくるのだろうか―

藤崎康彦

1、本稿の目的

本稿は、「男性学」の基礎的な概念と、前提とを改めて検討することを目的とする。「改めて」という意味は、男性学が日本に知られるようになってから四半世紀以上も経ち、その当時の状況と現今の状況にそれなりの変化が生じているであろうと思うからである。そうであれば、学や実践が立脚していた諸前提にも影響があるであろう。当時は議論の余地のない前提であっても、今はそうではないかも知れない。このような認識に基づく「改めて」である。

具体的には私が思考を迫られたある例を検討することを通して、今回の目的を追求する。

2、問題の所在

経緯

昨二〇一六年の三月に、豊島区の「男女共同参画推進センター」

の依頼で、同センター主催の市民講座のような場で、『第1部「男らしさ」それって必要？ 社会が求める「男性像」に、気がつかないうちに縛られていませんか？ 「男らしさ」に捉われず、「自分らしく」生きるために柔軟に考えてみましょう。』という題の45分ほどの講演を行った。

この講演の企画は「男性のいきかた、からだところろ専門家に聴く」という包括的なテーマで、第1部、第2部に分かれていた。第2部は男性不妊の治療の専門家である泌尿器科医が担当した。

主催者から判るように、広報のチラシには「男女共同参画社会は誰もが自分らしく生きると暮らせる社会のことです。男女共同参画は、『女性の問題』として捉えられがちですが、『男性の問題』であり、『社会に生きる皆さんの問題』でもあります。『男性学』そして『男性の心身の健康』について学ぶことをとおして、自分らしい生き方を考えるきっかけづくりをしませんか。」と述べられている。

その時の私の講演の内容としては、男になるのは生物学的にも社会学的にも手間がかかるという前提で、主に男が社会的に一人前になる過程について、比較文化的な話題も交えて、私の基本的な考え

方を述べた。プレゼンテーションの機器は使わず、紙媒体でレジュメを作って参加者に配布した。短い時間なので、十分に説明しきれないところはそれによって補ってもらおうと思ったのである。その時の話の要点及びその後の発展的議論は、論文あるいは研究ノートとして、別にまとめて発表したいと思っている。

実は、依頼者からの趣旨がよく飲み込めないところがあって、どういうことを（重点として）話せばよいのか、連絡をしてきた依頼者（この女性は、業務として担当してただけではなく、企画者としても主体的に関わってもおられたようだ）とメールでやり取りをした。私が特に気にしたのは、「男らしさ」と「自分らしさ」の関係の主催者側の考えであった。その検討が本稿の課題となる。

予備的前提

その前に予備的な事柄を以下の論述の必要上簡単にまとめておきたい。「男性学」なるものが日本で紹介されたり、実際に男性たちの（意識覚醒の）学習会や（「男性解放」）運動として実践されたりし始めたのは、一九八〇年代も終わり、ほとんど一九九〇年代になってからであると言つてよい。（アメリカでは一九七〇年代から男性学的関心が芽生えていたが、日本には、その他の社会現象と同様に、アメリカの動向がおよそ十年から二十年の時間差を以て伝わり、同様の現象や関心が生まれるのである。）一九九〇年代初頭に関西の伊藤公雄の男性学関係の最初の著作（伊藤、一九九三）が刊

行され、二〇〇三年には伊藤がNHK人間講座で『男らしさ』という神話』と題してテレビで八回の講義を行った。その頃が、一般にも「男性学」ということばが知られるようになった時期と言えるのだろう。「男であること（あるいは男らしさ）の困難」とか「男らしさのジレンマ」などということばをつけた著作物が、日本人によるものも翻訳物も多くこの頃から出始めている。

この一九九〇年頃であろうが、大阪に男性問題の研究会ができ、一九九五年には定まった場所に事務所を持った「メンズセンター（Men's Center Japan）」が設立され、その活動などをブックレットにして刊行し始めたのである。

それらに示された（特に伊藤の）言説には、あたかも「男らしさ」は鎧のように男たちが窮屈さを我慢して身に纏って、というよりそれに縛られているもので、それを先ず脱ぐことが「自分らしい」快適な生活を、男のみならず、男社会に抑圧されていた女性たちにももたらすのではないか、という趣旨の主張を読み取ることができ（メンズセンター、一九九六・五）。このような言説は男性学やジェンダー論の関係者には広く見られ、今回の市民講座の主催者側にも私はそれを感じたのである。それは、メンズセンターのこのブックレットの表題が、『男らしさ』から「自分らしさ」へであることから、伊藤の『自分らしい』快適な生活を、男のみならず、男社会に抑圧されていた女性たちにももたらす」というときの「自分らしい生活」と「自分らしさ」とはこのブックレットの著者たちに同義として了解されていたと推測することが可能であるからである。

男性解放という問題意識

このような歴史的経緯を理解しておく、「男らしさ」と「自分らしさ」について問い合わせたときの回答が理解しやすくなる。担当者からいただいた返事は次のような趣旨であった。(私信の性質を持つEメールは、公開を想定したものではない。したがって、回答の内容をそのまま引用することは、ご本人の了解を得ていないので、避けなければならない。回答の表現を生かしつつ、私のことばとして要約・説明する。従ってここに紹介した内容の責任は私にある。)番号を付してポイントを「」で括って紹介したい。項目ごとの私の理解や解説、などは後に「議論」の項でまとめて提示する。紹介文中「」で括ったものは、返事の中で、担当者が「」で括って記した部分である。従って、その部分については引用である。(一)内は基本的に私の補足である。また、原文は配慮が行き届いた丁寧な、敬語が多用された文体であったが、ここでは普通の文体に簡略化してある。

- ① 「このテーマを設定した背景としては(社会には)『男は外・女は内』という固定観念が(未だに)あるのだが、フェミニズム運動によって、女性は経済的・社会的に『男性の領域』に『権利』として足を踏み入れることができるようになった。」
- ② 「しかし逆に男性たちが『女性の領域(内)』に足を踏み入れようとする、社会的な反発が生じるように思える。この風潮がなぜいつまでもあるのか疑問としてある。」

③ 「例えば、個人レベルで見れば、(女性領域である)家庭に入っている男性も多くいると思う。しかし社会的な風潮として『専業主夫』は『専業主婦』と比べて許容されていないように感じる。やはり女性たちが男性に(経済的な)『頼りがい』を求めているからであると思われる。」

④ 「『自分らしく生きる』は、人生において様々な選択をする際、性別による影響を受けずに、自分が望む選択をしていくという意味である。ただ、女性も男性も『自分らしい生き方』を模索していると思うし、自分らしく生きる自由を手にしたところで、生き方のハウツーがあるわけではなく、生き方に迷っているところが多分にあると思う。」

⑤ 「むしろ『男らしさ・女らしさ』という規範があったことで、皮肉にも生き方が提示されていた部分があるのではと思う。」

⑥ 男性も、女性も、性(別)役割から解放されても、生き方の選択に暗黙の制限があり、『性別にのっとった生き方』と『自由な生き方』の狭間に(人々は)いるように個人的に感じている。そういったなかで『自分らしさ』を模索していくには(むしろ)困難にみえるが―注―これは担当者ご自身の文中で、カッコで括られた表現)どうしたらいいかを考えるきっかけになればと企画したのである。」

以上の説明を得て、鈍い私もようやくどこに違和感を持って落ち着かない気分になっていたのか、分かってきた。それをどのように

解きほぐして、議論したらよいだろうか。先ず何よりも「男らしさ」の思い込み（あるいは観念）から男たちが自由になっていないと、男も女も窮屈な思いをする（比喩的な表現ではあるが）とまとめることのできる基本認識があり、そこから（男女共同参画を推進したい）主催者の側としては、「男らしさ」から自由になるように促したい。しかし、自由になってどのように生きるかのモデルがないので、（男たちは）戸惑っているようだ。（男性学の担当者として）何かアドバイスなりヒントなりは提示できるか、ということだろう。しかし、結論から先に言うと、一般的にはこれは不可能だろうと思う。理論的な面からと現実的な面からの双方から考えてみる。

3、議論

(1) 主催者の問題意識へのコメント

先に私の責任でまとめた（私の理解の限りでの）主催者の問題意識の分析から始めるのが、議論の展開としてやりやすいので、そこから始めたい。

先ず①に『「男性の領域」に「権利」として足を踏み入れることができるようになった。』とある。「権利」は、刺激的な（強い）表現に感じるが、しかし男女雇用機会均等法によって法的に裏付けられたことを、フェミニズム運動の脈絡で獲得されたものである面を強調して述べているのであると理解できる。それは運動主体の立場から見れば、特に異とする必要はないだろう。

②と③は、つい最近出た本で山田昌弘はジェンダーに関する規範などについて「男女の非対称性」という概念で論じた（○）山田二〇一六）ことに関係する。これは④、⑤、⑥と関係して考えたい。

④に『「自分らしく生きる』は、人生において様々な選択をする際、性別による影響を受けずに、自分が望む選択をしていくという意味である。』とある。これは、「男らしさ」と「自分らしさ」は両立不能、あるいは（全面的ではないにせよ）相互排他的な関係にあるかのような言説に感じられる。そうであるから、「男らしさ」などの性別の社会的規範を受け入れていれば、⑤にあるように（主催者は「規範があったことで、皮肉にも」傍線部は私の強調—生き方が提示されていた部分があるのではと思う）とのべているが、生き方振る舞いに迷うことはないのである、と感じるのであろう。「男らしさ」と「自分らしさ」との論理的カテゴリー上の関係は、議論の「論点」の部分で改めて取り上げる。ここでは「らしさ」に従うことは、皮肉でも何でもなく、生き方を提示するものなのであり、文化人類学で言う「文化」とはそういうものだ（そういう機能を持つものだ）との主張をすることになる。

⑥の「男性も、女性も、性（別）役割から解放されても、生き方の選択に暗黙の制限があり、『性別割にのつとった生き方』と『自由な生き方』の狭間に（人々は）いるように個人的に感じている。」との指摘は、次のように解釈できる。本当に「性（別）役割から解放され」たとしたら、「生き方の選択に暗黙の制限がある」のは論理的におかしなことになる。しかし、「解放」されるのは本人の主

観レベルのことであり、「暗黙の制限がある」ように感じるのは、社会的なレベルでの制約を指している理解すれば、矛盾はなくなる。つまり、ここは（個人のあり方に対する）「社会的承認」に関する問題で、「男らしさ」と「自分らしさ」を考える際の急所であると思う。これはやはり議論の、「論点」の部分で展開する。

と同時に、「暗黙の制約がある」は別の解釈も可能である。社会的制約であることは同じだが、「性（別）役割にのっとった生き方」も「自由な生き方」も（どちらも）「できない」という意味で、「狭間」にいる男たちも存在するのであり、それもまた現代の「男性問題」の一つになりうるのである。

（2）論点

論点1…「男らしさ」と「自分らしさ」は対立概念か

社会的規範としての「らしさ」

「男らしさ」から「自分らしさ」へ、というとき、この二つの概念は対等に対立するレベルであるだろうか。概念として対になり得るものだろうか。「男らしさ」「女らしさ」等という時の「らしさ」は、社会的な概念である。社会の価値観であり、それが内面化されてその社会、その時代の人々の行動の規範となる。それに反した行動を取った場合、社会的な批判を受ける。陰口をたたかれたり、仲間はずれにされたりするような消極的な（あるいは暗黙の）制裁も、面

と向かって叱責されるような積極的な（あるいは明示的な）制裁もある。しかし、「らしさ」は基本的には習俗のレベルで機能するものであるから、法的、あるいは公的な罰を受けたりすることは余らない^①。

規範に対する違反は社会的な制裁によって（相当程度）抑止されることは確かである。それによって規範は維持される。しかし、むしろ人を規範に従わせる根本の動機は、内面化された価値観である。それは、そのように明瞭に自覚されていなくても、何となくそうしないとイケないような気がする、そうでないと落ち着かない、あるいは、そうするのは何か恥ずかしい、気が進まない、などの心理的な体験、山田の用語で言えば「感情」として現れてくるのである。そして、ことジェンダーに関しては、そういう場合が多いのである。つまり人は自発的に規範に従っているのである。

明らかのように、「男らしさ」はこの社会的規範である。これに対して、「自分らしさ」は社会的規範ではなく、全てあるいは常にといいわけではないが、社会に対立するものである。そもそも「自分らしさ」等という概念あるいは感覚が生じてきたのは、アイデンティティということばの意味の変化を見れば分かるように、近代以降の（従って先ず西欧の）ことであろう。「自分らしさ」を解きほぐすためにアイデンティティ概念を手がかりにしよう。

アイデンティティと「自分らしさ」

古代社会とまでは言わなくとも前近代社会とか（文化人類学も研

究対象にしていた) 伝統的の社会といわれる社会は、個人は社会に埋め込まれた存在であったということができよう。社会の中の地位(階級や親族組織の中の位置など)によって、ある人は「人格」あるいは「位格」として認識されているのであり、基礎となる社会を離れては、人は存在しないのである。

アイデンティティも社会の中での「何者」であるかを示す概念だった。(身元とか、正体とかの意味がこのことにはあることを想起すればよい。) ある職業(様々な職人など)を得て、初めて社会の中で人格は認められる。エリクソンの言うように、それまではモラトリアム状態で、(家系などであらかじめ定められた)社会的地位を得て初めて人格、アイデンティティを社会からいわば認められるというより、付与されるのである。

こういう社会では「地位」が先にあり、そこに誰が就くかは規則で決まっていることで(何々家の長男など)、その人がいかなる性格的特徴を持つとか、いかなる能力を持つかなどは本質的なことではなかった。つまり地位のあり方としては社会学で言う帰属的な地位である。人の名は、そういう意味での地位としての「人格」を基本的に表すものである。「襲名」の制度をもつ日本の芸能の世界を想起すれば、その特徴を理解できるだろう。こういう社会では「人格」は「社会がそう認めるところのもの」である。

これに対して、人が個人として独立し、社会に埋め込まれた存在ではなくなる(こういう意味では社会の中から個人として析出し、という方が適切かも知れない)時代が近代である。ここでは人は「何

者であるか」を自ら選ぶことができるとも、その存在に対する承認を主体的、積極的に社会に求めなければならないとも言える。その時、アイデンティティは個人としての内面的な自覚を備えた、独自の存在を指し示す概念になる。

アイデンティティ、人格、個人などの概念はこのように近代以前と以後では異なったものになったが、「自分らしさ」は、こういう脈絡の中で新しく生まれてきたものである。先に述べたように、「男らしさ」は異なる。それはむしろ個人を越えた制度であり、近代以前から存在した。この違いは概念の質の違いあるいは「レベル」の違いとして認識すべきだと思ふ。

論点2:「男らしさ」から自由になり「自分らしい生活を」実現することは、それぞれの男の個人的問題(あるいは責任)なのか。

まず、「男らしさ」の「困難」とか「ゆらぎ」とかが問題になるのは、どのような状況、場面においてなのか整理しよう。これまで述べてきたように、「男らしさ」が問題になるのは社会的な脈絡においてなのであることは明らかである。従ってそれを体现している(あるいはそれ故に「男らしさの困難」に苦しんでいる)個々の男の問題にしてはならない。「個人的なことは政治的なこと」(The personal is political.)という定式化は、ウーマンリブの過程でフェミニストたちが発見した真実であろう。そうであるなら、なぜ「男らしさの病」などという言い方で、個人の問題であるかのように歪

曲あるいは矮小化するであろうか。社会的な脈絡で男らしさ（の縛り）故に男が苦しんでいるとするなら、その解決（というよりむしろ救済）は、個人のレベルにおいてと同時に（むしろそれ以上に）社会のレベルにおいても議論せねばならないであろう。

私たちが当然と思っている近代社会においては、男たちは社会的存在と家庭の存在の両属的な関係に置かれている。しかし、現象的には（身体的存在としては）両属だが、男たちの意識としてはこれまで、本質として社会（会社あるいは仕事）的存在であった。職場で目一杯働いて、疲れて家庭に帰ってきて、妻子の許で癒やされ再び翌日仕事に励むことが、男のあり方であるとして男女ともに疑ってこなかった。そこでは男は、家庭（育児、教育、介護など）のことは女に任せて、顧みなかった。もっと言えば、男が職場で働くように女は同等に家庭で、生きる上で欠かすことのできない仕事を担っているのだ、という認識を男が持つことができなかった。男が家庭の支配者であると思ひ込んで（思い上がって）いた。それでもある時期までは、女の側が我慢して、大きな破綻は生じなかった。しかし今は違う。男がそれほどのものではなくなったからである。

興味深いことに、二〇〇〇年台始め頃までの、未だバブルの余韻が社会に残っていた辺りまでと、二〇〇八年のリーマンブラザーズ破綻に端を発する、いわゆるリーマンショックと言われる世界的金融不安による、二〇〇九年以降の持続的かつ世界的不況に見舞われた現在とでは、「男の困難」の意味が違ってきているように私は感

じる。^⑦日本経済が（まだ）好調で、雇用もそれなりに安定していた二〇〇〇年初頭頃迄は「男の困難」は、例えば定年後の熟年離婚とか、退職後の生き方への戸惑いとか（会社を離れると地域に属していないことが影響しているのだろうか）、家にいると妻に濡れ落ち葉扱いされているとかが話題になった。もちろん心身の衰えから来る諸現象もその時代なりの姿をとって「困難」としてあったはずであろう。現役世代でも（会社人間のために、家族との生活がおろそかになるのだろうか）家族に受け入れられていなくて浮いているとか、家庭内のコミュニケーションがうまくいかず、つい暴力を振るってしまう（いわゆるDV）とかの問題があった。若い世代の男性でも（異性と出会う環境にない、出会ってもコミュニケーション能力が低くて関係が発展しないなどの理由で）結婚難が問題になっていた。しかし、経済的理由による結婚難は表だって出ているはなかったように思う。（経済力が理由で配偶者を見つけれないとしたら、それこそ男の活券に関わることだから、メンツにこだわる男たちは言えなかったのかも知れない。）

これに対して「リーマンショック」後は、社会的に貧困と格差（それに孤立、孤独）が表面化してきたように思う。今は少し持ち直しているとは言え、しばらく前の就職難は深刻なものであった。また、非正規雇用が増え、男女ともに所得が減少した。働き口がある人でも過酷な労働条件、特に残業など労働時間の長さは心身に悪影響を及ぼしている。一家の大黒柱（bread winner）というべき男たちがこれまでとは異なる状況に苦しんでいるように思われる。これら

は当人のみならず社会全体に様々な影響を及ぼしている。

このときの不況で、アメリカにしても日本にしても、男たちにとって決定的な事態が生じている。リーマンショック後の大不況においてアメリカでは雇用が大幅に減少したが、その大部分は男性の雇用だった。製造業や建設業（そして不況の震源地の金融業も）のような「男性職場」と言われていたところが最も雇用を減らしたのである。この男性雇用の減少を指してアメリカでは「Incession」（日本では永濱が「男性不況」と訳している例があるが、余り一般的には知られていないと思う。Cf. 永濱、二〇一二・一八）というらしい。このときに起きた変化をローゼン（Rosin、二〇一二）は著書の表題で「男性の没落（The Fall of Men）」と称している。

この不況の遙か以前から実は「グローバルゼーション」によって、アメリカの製造業は空洞化していた。いわゆる「中西部」が影響を受け、バイブル・ベルトならぬ「ラスト・ベルト（Rust Belt）」になってしまった。その過程でその地域の職を失った人の多くが当時は中産階級とされていた白人男性であったようだ。日本でも二〇〇三年（小泉内閣時）に労働者派遣法が改正され、その対象職種が拡大されて、派遣という「その企業が直接雇用する正社員ではない」という意味での「非正規雇用」が増え、社会的格差の増大につながったと言われている。この派遣社員のかんりの部分は製造業の男性であると思われる。このような状態が日米で潜在的にあったところにリーマンショックという決定的な打撃が加わったのである。

この「男性不況」は「男らしさ（のプライド）」を傷つけないか

ただろうか。日本では通称「三〇〇万円の壁」と言われているのだが（例えば永濱、二〇一二・一二七）、男たちはこの水準以下の年収では、結婚をあきらめると言われている所得レベルがある。そして、そういう男性が増えてるのである。これは「性別割分業にのつとった生き方」もできないし、（自ら選び取った）「自由な生き方」もできない（というより、自由な選択など不可能で、日々生きていくだけで精一杯に近いかもしれないような）、一種の閉塞状況に落ち込んでいることを意味する。

このような状況では、個人のレベルでは「結婚をあきらめる」という解決法しかないかも知れないが、社会レベルではどうであろうか。理論的には近代家族の性別割分業の復興を目指す方向が一つは考えられる。「男らしさ」の意識を持てるような地位にもう一度男を就けるのである。

もう一つは性別役割分業を廃止することである。実際的には性別役割分業を制度的に維持できなくなるような様々な方策を実現しなければならぬ。家族単位の社会制度を個人単位に組み替えるとか、完全な同一労働同一賃金を実現するとか、労働時間に制限を加えて、男女（夫婦）が家庭運営に対等な関与ができるようにするとか、育児に関する福祉制度を充実するとか、様々思い浮かぶ。しかし、ここでは私には未だ踏み込んだ議論をする準備と余裕がないので、理論的な可能性の指摘だけに止めておきたい。

4、結論に代えて—暫定的なまとめ—

まとめ1…「男らしさ」へのこだわりをまず取り去って、それから「自分らしさ」を追求することは可能なのか。

私の暫定的な結論は、「可能ではない」である。前述の如く、また以下に改めて述べる如く、「男らしさ」は社会的規範であるので、他の規範で代替するのでない限り、規範へのこだわりを取り去るだけでは、自由は得られないからである。

社会を形成して人は生きてゆかなくてはならない以上、その社会の規範には従わなくてはならない。規範などと言うと大袈裟に感じられるが、日常のコミュニケーションの観点から言えば、それはコミュニケーションの共通のコード、つまり約束事と同じである。最も基本的なものとはことばである。その社会で使われることば（語彙や文法など）ばかりでなく、どの場面で誰に対してどのような言葉遣いで話すか、などの社会言語学的な知識も含む）で話さなければ、人は自らを他者に理解させ、受容させることはできない。

このようなコードは何もことばだけではなく、例えば「ドレス・コード」などもある。このように様々なコードが日常生活場面のあらゆる局面に亘って精密に組み立てられている。また、相互に関連している。服装はジェンダーを（外見上一番分かり易く）表現するものだから、ドレス・コード自体がジェンダー規範の一部なのであ

る。

服装にまつわるような「ジェンダー規範」は、瑣末な、あるいは表面的なことと言えば言うことはできる。今回の議論は、もっと本質的なことであった。問題は、近代家族の性別役割分業において主として男たちが女性領域に進出ししない、あるいはできないことであった。それは男たちが「男らしさ」に捕らわれている（つまりジェンダー規範が邪魔をしている）せいではないか、それを自ら解放するためにはどういう方策があるか、という（女性側からの）設問であった。

しかしそれも、今回の講座の企画の趣旨からすれば具体的に、家庭内での家事や育児、介護などの女性領域とされている役割を担うこと、また不妊治療では妻にのみ責任を負わせず、協力することなどに（決して矮小化しようとの意図からではないが）突き詰めれば帰することができる。ここでは例えば、そもそも男が（主として経済的な理由で）結婚できないこと、男女の性別役割を転倒させること、あるいは性別役割分業自体を廃棄（廃止）してしまう可能性などは、問題として初めから認識されていないと感じる。男性にとって（当然パートナーとなる女性にとっても）低い所得のために結婚をあきらめる事例が増大しているとすれば（現にしているのだが）、それは男女共同参画社会実現の関心にはならないのだろうか。敢えて問題を拡散しているかに思われることは避けて、「男らしさ」から自由になる、あるいは「自分らしさ」を追求することに限って議論を整理しよう。

まとめ2…男らしさから解放される方法論

どうしたら解放されるのか

まず（本来の課題である）「男らしさ」から自由になる、男らしさという窮屈な「鎧」を脱ぐことはそもそもできるのか、できるとすればどうすればよいのかについて考えてみる。その際、これまでは否定的な議論に重点を置いてきたので、視点を変えて、後者の方法論から検討する。なぜなら、こうすれば「男らしさ」から自由になることができるという有効な方法論あるいは処方箋を示すことができるれば、上記の二つの問いは、同時に処理（解決）することができるはずだからである。

これまでのところ（管見の及ぶ限りでは）一般的に有効な方策は示されていない。誰もがそれに従って目的を達することのできるような、「ノウハウ」は無いようだ。伊藤の一九九六（a）の文を先に引用したが、同時期に出された伊藤の一九九六（b）でも、「はじめに」で同趣旨のことをただ、次のようにアイロニカルな表現で述べている。「ばくは、男たちも、そろそろ古い窮屈な（男らしさ）の鎧をそれこそ『男らしく』（つまり潔く—藤崎注…このカッコ囲みは伊藤のもの）脱ぎ捨てる時期だと思ふ。」（同書…5）男らしさを捨てるのに、先ず男らしくあれというのは滑稽に感じるが、それともかく、「鎧を脱ぐ」という比喩が具体的にどうすればよいのか示されていない。尤も同じく同書でゴールドバーグの『新しい男

の時代』（ゴールドバーグ、一九八二）から十二箇条からなる「処方箋」を、伊藤なりのまとめによって、有効であるとして引用している。しかし、その第十二は、「自分の人生を自前のものにしなさい（型にはめられた（男らしさ）の役割モデルから解放されなさい—藤崎注…このカッコ囲みは伊藤のもの）」（同書…一二五）とある。「男らしさ」から解放されるための方法を求めているのに、求めているまさにそのことを実現するように努力しなさいと、最後の最後に言われては、肩すかしを食ったような気分になろう¹³。

このように、どのようにしたら「できる」のかについては、納得のいくものを（飽く迄も未だ）見ていない。とするならば、やはり「できる」かについては疑いを持って検討すべきだろう。

「男らしさ」の鎧を脱ぐということ

この見出しの表現は、比喩であることは当然である。比喩は感覚的に分かり易いが、論理的な説明とは異なる。分かりやすさのためにこの表現を利用するならば、検討すべき最初の問題は、「男らしさ」とは鎧のように脱ぎ着ができるようなものなのか、になるだろう。次に脱いだとすると、裸になってしまふのか、それとも社会的な装いとして何か他に着るものがあるのか、あるとしたらそれはどのようなものなのかは問題になるだろう。

これまでの議論で明らかのように、「男らしさ」は「ジェンダー規範」であり、それは明示的なものというより、「身体化」され、「感情」と深く結びついたものである。あることをしたり、しなかった

りすることは、知的な判断で行うというより、それぞれの場面で極めて当然の、当たり前の、自然なことに感じられるような、そういうものとして現象しているのである。

「ペルソナ」は、周知の通り劇中の「仮面」が原義である。役柄に応じて着け外しする。役者は、その仮面をつけている限りにおいてその仮面が表す「人格 (Person)」となる。着脱自在の点では「鎧」の比喩も「仮面」の比喩も、「男らしさ」の比喩として使用可能である。しかし日本の説話にある「肉付きの面」のように皮膚に張り付きというより、それが皮膚化してしまう比喩も思い浮かぶ。仮面が分離できず、それと本来の自己(あればの話だが)と区別できなくなるようなことは、心理学でいう「役割的パーソナリティ」を思い合わせれば、あながち比喩とばかりは言えないかも知れない。

このような比喩的な議論は、主観的な体験を重視したものが、「男らしさ」を考える上で本質的に重要なことは、社会的な側面である。それは具体的には、ほかの男たちからの評判や評価という形で現象する、その男を取り巻く社会からの承認である。男たちは他の男たちの目を気にしてなかなか「男らしさ」を捨てることができない⁽¹⁴⁾。ここでもやはり「男らしさから自由になる」ことはすなわち社会生活から降りる、これまでの付き合ひ(社会関係)から離脱することににつながる。日本的に言えば「世間を捨てる」ことにならざるを得ない。

したがって、それでもやりたいことがあるかどうかが急所なのだ。今回は問題設定が逆であるのだ。「男らしさから自分らしさへ」で

はない。自分のやりたいことを追求していけば、「男らしさ」など問題にならなくなる。だからこそその在り方(生き方)は、一人ひとり個性的なものとなつて、それぞれに違つてくる。誰にも使える「ハウツー」は初めからないのだ。

以上が、今回の私の思考のたどり着いた、暫定的な地点である。

謝辞

まだ整理しきれていないものを発表することに躊躇するが、怠惰故自らに迫らないと思考を進められないので、あえて発表させていただく。このきっかけを作つてくださり、逃げては「男がすたる」と思つて考え続ける機会を与えてくださった、豊島区男女共同参画推進センターの担当者の皆様には心からお礼を申し上げます。

また、老いのために筆が遅くなつている私に寛容に接して下さり、何とか脱稿まで導いてくださった『人文学フォーラム』担当の阿部一哉先生にも末筆ながらお礼を申し上げます。

注

(1) 慶應義塾大学ご出身で都内の大きな病院に勤務されている大橋正和先生である。講演の要旨は、不妊の原因のかなりの部分は男性側にもあるのだが、広く共有された認識とはなっていない。(未だに不妊は女性の側の問題と思つている人はいるようだ。)更に、男性側由来する不妊のタイプは様々で、それぞれに治療法がある。従つて適切な治療を行えば、(かなり深刻な症状を持つていても)子供を持つことは可能である、ということと私は理解した。発生学特に男性の性分化や性機能の発達など興味深いトピックから男性不妊のタイプや原因、治療まで豊富な情報が含まれた、啓発的な講演であった。

しかし、機器や時間などの関係で、貴重な写真などを見ることができなかつたのは男性学の研究者としては、すこし残念であった。

主催者側の意図としては、不妊を女性の問題と決めつけず、男性も協力して治療を受けて欲しい、ということだろう。明示的には主催者側は述べてはいないが、受胎させられない男であることは、男としてのメンツに関わることで、それを認めることは抵抗があるだろうが、子供を持ちたい女性に協力して欲しいとのメッセージが込められているだろう。子供を儲けることは男女の対等な関与と責任が必要なのであるとの認識は男女共同参画社会の理念に沿うものであることは理解しやすい。

私が鈍くて後から気が付いただけのことだが、むしろ大橋先生の話を先に配置して、男性不妊のトピックを前提にすれば「男らしさ」から『自分らしさ』への論議設定の趣旨は明白になったのではないかと（本当に後知恵だが）思う。

(2) 但し性的な行動については、規範に対する違反は、インフォーマルな制裁では済まず、宗教的、もしくは法的（といっても慣習法であつて成文法の例は少ないように思う）な制裁が下されることがある。例えば、男性の同性愛行為は、文化によっては宗教的戒律によって、あるいは法的に禁止された。

又、古代から宗教的な面と法的な面との区別がつきにくい規範あるいは制度もある。というより古代は宗教的な戒律が、今日の法律と同じ性質を持っていたと言ふべきなのだろう。違反に対して、例えばそれを罪ないし穢れとして、超越的な存在が認識し、それからの罰として社会的な災いが起こる、とか病氣など個人的な災厄が起こるとか考える場合も、名譽が汚された、失われた、などとして社会的に罰する場合もある。例えば男性同性愛が認められている場合でも、相手の同意なしの行為は神の怒りと呼び、神の呪いがかかる場合がある。ギリシア悲劇のエディプスの物語は、エディプスの父であるライオスが、同意なしに若者をいじめたことに神が呪いを掛けたこ

とよると考えることができる。また、近親相姦などは一族や、地域の穢れと感じられ違反者は地域から追放されたり、もっと厳しい制裁を受けたり、気の狂った者として社会的に葬られたりする。

女性の純潔性を重んじる社会では、婚姻前に男と関係を持ったことが分かる、一族の名譽を汚したとして娘は家族の男性成員によって殺される場合もある。それは宗教の異なる者との関係も同じで、相手共々一族の者の手で殺されることもある。これは特に身分の高い、それ故に名譽を重んずる人たちの間で生じる。これは今でもアメリカのテレビドラマなどで、アラブ・イスラムの文化の人たちのこととして、しばしば描かれている。

(3) なぜそういう感情を経験するかは、社会的存在として、人は「承認欲求」、すなわち他人に自己を承認されたい、受容されたいという根源的な欲望があるからだと思定することは、議論の前提として妥当だと私は思う。

(4) 「らしさ」は男など（集合的なカテゴリー）の属性について、特徴づけをするときに使われることばだ。擬人的に組織名なども入ることがある。例えば「跡見らしさ」など。したがって、「○○らしさ」の「○○」は基本的に概念が入るはずである。これに対して個人名や、(三人称) 代名詞などが入ると、社会生活の場面では異なるニュアンスが出る。例えば、何か他の人々が是認しないことをある人が行った時など「いかにもあいつらしい(例えば「強引な」やり方だな」とか、(普段から空気を讀まない)「○○(個人名が入る)らしい馬鹿な発言だったな」とか、大概は批判、否定的な評価が含意される。そういうものであるとしたら、「自分らしさ」を社会的場面で言い立てることは考えられない。自分で自分を評価する場合にのみ(私的な事柄として)意味を持つ。「自分らしく」生きたい、とか「自分らしい」生活を送りたいなどである。しかし、それも他と軋轢を起こさず、その限りで他からの何らかの承認(例えば消極的な容認、黙認など)が得られる限りにおいてであつて、「男らしい」のように一般的に是認されるものとはならないだろう。

(5) このように言うと、「男らしさ」は前近代的な心性を脱けていないものの特徴であり、「自分らしさ」は近代的な心性に基づくものである、というような一種の近代化論と誤解されかねない。それが私は嫌なので、質の違うカテゴリーとすることで、同じレベルに並べることを避けたいのである。

(6) 「誰が食わってやっているんだ」というのはこういう男たちの、妻に対する常套句である。あるときから妻たちは夫たちのこの言い草に沈黙することをしなくなったのである。

(7) というより、明日は今日よりよくなると信じられた時代、右肩上がりの所得などを疑わなかった時代という意味で、昭和三十年代以降の高度経済成長の時代と、グローバルゼーションとリーマンショックの現代とは、いっぺきかもしれない。

(8) 但し、男は減ったが、女は増えて、男女の所得格差は(相対的に)減少したとの指摘もある。(Cf. 水濱)

(9) 「ラスト・ベルト」に工場を呼び戻し、もう一度男たちが安定した職を得て、一家の大黒柱として働く、というイメージが、トランプ大統領の政策には感じられる。移民を排除して、復活した地位に白人男性を就けたら、かつて中産階級として暮らしていた、今はそこから脱落してしまったと感じている白人家族からは支持されるだろう。この是非には触れない。しかし、堅実な中産階級が消滅して、少数の富豪と圧倒的多数の貧困層に分裂してしまったことがアメリカの―そして今の日本でも進行しつつある―社会問題であることは、多くの人が様々な視点から指摘していて、例を挙げるのに多すぎて困難を感じる。(一例として、エーレンライク、一九九五)

(10) フランスなどは例外的に合計特殊出生率が上向いているし、北欧諸国は子育て環境が充実して、人口減少は先進諸国でも目立たない。これらの国々の施策などは様々な研究で紹介されたり、議論されたりしている。私がそれらを消化していないだけである。

(11) これは、例えば「性同一性障害(GID)」の人たちは自己のジェンダー・アイデンティティと関連するので、服装に関心を抱くことから明瞭になる。議論の本筋からは幾分バランスを失って量が多いので、このGIDの話は注で述べたい。「ジェンダー・アイデンティティ(性自認)として男性」であると思っている「身体的には女性」の人はFTM(Female To Male transgender)という。性別再指定手術、いわゆる性転換手術を済ませている場合は(post-op) transsexual というのが普通である。これに対して、「Transgender」という場合は、手術をまだしていない、あるいはそこまでは考えていなくて、社会的に反対の性別で生活することを望んでいる人を指す場合が多い。従って、FTMの人はスカートを嫌悪する。ではどのような「男の表現」をするか。おもしろいことにジェンダーの「非対称性」が服装にも及んでいて、女性は男性的な服装を自由にしても今は社会的にさほど問題にならないので、「男らしい服装(男固有の服装)」は意外と少ないのである。(本質的に男の職場とこれまで考えられていた―例えば、軍隊、警察、消防など―ところの「制服」は別である。それはジェンダーの記号でもあるが、職業や地位の記号でもある。ここでは例外とする。)サラリーマンの「制服」あるいは現代の侍たる「企業戦士」たちの「鎧」として、スーツなどが選ばれることになる。そうでない場合は、むしろ「中性的」な服装になる。いずれにしても女性性の指標である「スカート」だけは避けるのである。

一般にGIDの人たちは、ジェンダー表現に細心の注意を払う。例えば、FTMの反対の、「ジェンダー意識(性自認)は女性」で「身体は男性」であるような人はMTFと(簡単に)いうが(GIDと見なされる人は世界的に見てこちらが、FTMの数倍に上るとみられている。医療機関にかかるMTFの「患者」はFTMの少なくとも二倍から三倍はいると思われる。)彼らは現実の女性の服装の多様性の利益を享受して、和服からスカート姿から、様々な自由な表現ができる。髪型も多様である。そして化粧も実に入念に行

う。逆説的なことに、G I Dの人が「自分らしい性別を生きる」ことにすると、(反対側の性別の)ジェンダー規範が強調された(規範に過剰に従った)表現になることがあるのである。ある面それほどジェンダーにまつわる社会的規範は強いのである。

(12) 主催者からの回答の③には「専業主夫」への言及があり、社会的にはまだ許容されていない気がする、との指摘があった。白河(二〇一六)を見ても、それぞれの(余儀ない)事情でそうなった例が多いと感じざるを得ない。

(13) 伊藤の引用するゴールドバーグの名誉のために付言すれば、かれの十二箇条のアドバイスは、いわば(近代的意味での)人格を円熟させるためのアドバイスとして読むほうが適切なものである。伊藤のまとめよりももちろん詳しく書いてあるが、決してジェンダーとか「男らしさ」に視野を限定しているわけではない。(男ということではなくむしろ)人として社会の中で意義ある生を送るにはどうするかを考えようとしているように感じた。

(14) ラテン系の文化は男らしさと名誉を重んじる文化であるといわれているが、ベルもそうである。大平(一九九六)の描くベルの下層社会の男たちは、いわば男同士で「飲む・打つ・買う」に耽り互いに放蕩の競争をしているように見える。友達(アミーゴ)には気前よく奢り、酒でも女でも喧嘩でも他の男たちに強さを見せつけて称賛を浴びることが、生き甲斐のような生活を送る。そのような生活しかモデルとして知らないということは別にしても、ほかの男たちからの称賛は、彼らのプライド(アイデンティティ)の源泉なのである。

(15) 私はこの点では西行法師の逸話(?)を連想してしまう。北面の武士であった佐藤則清(義清)は妻子との絆を断って、出家して歌人として名を成した。先ずは男らしさを捨てて、その後自分らしさの模索の結果、歌人になったというのではないだろう。無常にとられて歌詠みになりたい(歌による表現を追求したい)ことが根源的な欲求であったろう。その結果ありきたりの男

としてのしがらみである世間的関係を自ら断ち切ったのである。行きたい場所のない人は世間で穏やかに生きるだろう。

参考文献

- エレンライク、バーバラ 一九九五 『中流』という階級 晶文社
 ゴールドバーグ、H. 一九八一 『新しい「男」の時代』 P H P 研究所
 稲葉陽二 一九九六 『中流』が消えるアメリカ―反映の中の挫折― 日本経済新聞社
 伊藤公雄 一九九三 『男らしさ』のゆくえ―男性文化の文化社会学― 新曜社
 伊藤公雄 一九九六 (a) 『男性問題の時代』メンズセンター編一九九六所収
 伊藤公雄 一九九六 (b) 『男性学入門』 作品社
 伊藤公雄 二〇〇三 『男らしさ』という神話 日本放送出版協会 (NHK人間講座テキスト)
 マグレディ、マイク 二〇一四 『主夫と生活』アノニマ・スタジオ
 メンズセンター 編 一九九六 『男らしさ』から『自分らしさ』へ』 かもがわ出版
 わ出版
 メンズセンター 編 一九九七 『男たちの「私」さがし』 かもがわ出版
 永濱利廣 二〇一二 『男性不況』 東洋経済新報社
 中村 正 一九九六 『男らしさ』からの自由』 かもがわ出版
 大平健 一九九六 『貧困の精神病理―ベル社会とマチスタ』 岩波書店
 Rosin, Hanna 2012. 『The End of Men. Viking』
 白河桃子 二〇一四 『専業主婦になりたい女たち』 ポプラ社
 白河桃子 二〇一六 『専業主夫』になりたい男たち』 ポプラ社
 山田昌弘 二〇一六 『モテる構造 男と女の関係学』 筑摩書房
 ゼムール、エリック 二〇〇八 『女になりたがる男たち』 新潮社